河上徹太郎

高橋英夫

小沢書店

河上徹太郎

定価二〇〇〇円

昭和五十九年十一月十五日印刷
昭和五十九年十一月二十日発行

著者　高橋英夫

発行者　長谷川郁夫

発行所　小沢書店
東京都千代田区富士見二―五―十二
電話（東京）二六三―九二一八（代）

印刷　暁印刷

製本　大口製本

© H. Takahashi, 1984 Printed in Japan

河上徹太郎　目次

I

純粋の発見　9
近代批評の開拓者　36
自然と純粋のあいだ——小林秀雄と河上徹太郎　40

II

批評家の誕生　69
人間像へのアプローチ　85
ヨーロッパ精神のかたち　101
美と信仰の奥処　117
文芸閑談の世界　134

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

史伝と史論　150
ストイックなエピキュリアン　168

Ⅲ

晩年の著書から

『河上徹太郎全集』（勁草書房版）第一巻　187
『吉田松陰』　189
『有愁日記』1　197
『有愁日記』2　199
『近代史幻想』　203
『厳島閑談』　204
『厳島閑談』『史伝と文芸批評』　206

Ⅳ
逆説のなかの師——河上徹太郎と私　211
あとがき　222
初出一覧　225

河上徹太郎

I

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

純粋の発見

1

月日のたつのは早い。河上徹太郎氏が昨昭和五十五年の九月二十二日に亡くなってから、もう半年以上過ぎてしまった。この半年、私は河上氏のことを考えたり、その著書をあれこれ読んだりする日がかなり多かった。今でもそうである。『私の詩と真実』でも、『日本のアウトサイダー』でも、一度読み出すと、あちらこちらの頁に線が引いてあり、書き込みもしてあって、前に読んだ記憶が甦り、さまざまな想念に取り囲まれてしまうのである。こういう状態の中で、ついいつまでも読み続けるということを繰返していた。そして、亡くなられてから後も、昔読んだ時と文章の感じが少しも変らないのを感じた。読み返すたびに違ってみえるという印象が生じないのである。さして時間もたっていないせいなのか、

又は別の理由によるのか分らないが、その点を問題にする気持は、いまはない。ただ、直接に人柄に触れる機会があまりなくて、作品を通じてだけ河上氏の精神に惹かれてきたといえる私は、少しも印象が変らないというその点にあらたに安らぎを覚え、同時に懐しさといった感じを味わっていると言うに止めよう。

それとは別に、しだいにはっきりしてきたもう一つのことがある。それは、河上徹太郎という精神に入ってゆくには幾つもの入口があり、決して公定的な一つの入口しかないという構造にはなっていないという不思議な柔軟性である。といっても、正面と裏面とがあるというのではない。幾つもあるどの入口も、前に来て立てば、まさにそこが本当の入口になっているという感じがするといった方が正確だろう。こういう比喩に託した印象を過信しては間違いだろうが、この人物はとにかくどんな側面から取りついても、真の奥座敷に通じているような所があるのだ。つまり迷宮ではないのである。措辞がやや難解であるとは言われてきた。だが迷宮状の行き止りにはなっていなかったと感じられる。

その文芸評論家としての表芸は、初期の『自然と純粋』『思想の秋』から『戦後の虚実』『近代文学論』などをへて、『有愁日記』『西欧暮色』にいたる著作に含まれている。それらからは、あの有名な「自然と純粋」という河上批評の公理の定立とその実践、応用がいたるところで読みとれる。ところがそれとは違った別の正面は、『吉田松陰』『近代史幻

想』『歴史の跫音』などの史伝、史論の作品によって形づくられている。これらにもあの公理「自然と純粋」は作品の荷重を支える構造として機能しているが、それらを読んで得られる印象は文芸評論とはかなり異っていて、確かにこれは別の入口だと感じられる筈のものである。晩年にはむしろ史伝が主たる仕事になっていたし、その意味ではこちらが本当の入口だという声の方が大きかったとしても不思議ではない。

しかし、だからといって『ドン・ジョヴァンニ』『孤独な芸術幻想』などの音楽論、『新聖書講義』などの宗教論から入っていって、これが河上徹太郎だと確信し得るまでの歩みが、史伝や文芸評論にくらべて低次元の、輪郭のぼやけたものであるというわけでもない。文芸評論に着手する前、河上氏がそもそものを書き始めた最初のジャンルは音楽評論に他ならなかった、ということがあった。また大正十五年「山繭」に掲載された『美と祈りと』というエッセイの題が既に示唆している通り、芸術の究極的根拠として神が想定されていた。このように、批評家の発展史に沿ってみてゆけば、芸術と宗教の一体境が最初にして最後のものであったということも、誰が見ても明らかなのだ。だからこちらが本当の正面だったのだというのも、実感としては当っていると言わなければならない。

それだけに止らず、自ら称してエピキュリアンといったような資質も、紛れもない河上徹太郎の本質であったのを忘れるわけにはいかない。この面からいうと、著書の題名『エ

ピキュールの丘』『旅・猟・ゴルフ』などに端的に窺われる生活の悠々たる享受とそれを過不及なくあらわしている厖大な随筆、エッセイの世界が真正面に見えてくる。そこに浮んでくるこの人物の表情、雰囲気は、決してその場かぎりのものではない。それらを読みとり、そこに漂っている風格を感じとれたら、それは河上批評の中枢部に直結しているのを信じてよいと言いうる何かに違いなかった。

このように河上批評と呼びうるものは、河上徹太郎という一つの精神が幾つもの小面（フェセット）となって外にあらわれた形である、と私は感ずる。どの小面もある輝度をもっており、それぞれが正面なのだ。そしてこの輝きの奥に中心があると感じられる点でも、すべての小面は等しい。文芸評論と史伝から、それぞれが結局のところ「純粋」の追求、発見として書かれていることを示す例をあげよう。

例へば赤い林檎を見て、「この林檎は赤い。」といつた場合、自然人は純粋にそれだけを意味してゐるに対し、純粋人は「その陰は紫だ。」といふ意味を必然的に含んでゐるのである。（中略）この純粋精神を最初に最も率直に且つ包括的に宣伝したのは、従つてキリストである。彼の無限に入り組んだ贖罪に関する方法論は、無限にある人性の方向を互に交錯することなからしめんために、扇の骨が総べて要に向ふ如く、その極限概念

たる一の純粋性に向はしめたのである。最後の審判とはこの純粋性の表現である。

（『自然人と純粋人』）

象山こそ、松陰が身近に接して「わが師」と呼ぶことを敢てした唯一の人であつた。然しこの二人の性格は、人間的にいつてかなりかけ離れてゐる。象山は人を食つた怪傑であり、松陰は誠実、実直な人である。私は松陰の人柄は無類に好きだが、象山は好きになれない。だからこの二人がしつくりゆくとはどうも考へられない。松陰と対照的な橋本左内の才士振りだつて、私には決して厭味ぢやないのに、である。では、それ程象山の時局認識や洋学の知識が松陰を捉へて離さぬ魅力だつたのだらうか？　つまりそれは象山の人間的な魅力であるより、松陰が危機感といふものに憑かれた人であつて、象山がこの泣き所に触れた人だつたと解するのが、今のところ私の結論である。

（『吉田松陰』）

前の引用は文壇的処女作からで、内容は「純粋」原理のための論証と比喩であり、キリストが最初にして最大の「純粋人」であるという考えは、確信をもって言われている。一方後者は、河上氏の円熟を示す『吉田松陰』の一節で、松陰と佐久間象山の人間的交わり

の機微を考えた個所であり、ここでも、松陰が「純粋人」の極限形態として思い浮べられていることは、疑問の余地がない。両方とも特にさわり的な部分とは言えないにしても、私には、どの面からみても河上批評の特色を典型的に発揮していると感じられる。それは「純粋」が極限概念であると明言されているにもかかわらず、常に関係概念として活かされているために他ならない。思想と思想の対比、人物と人物の交渉によって論理が錯綜、混乱を呈しかけ、明暗の混濁が生じたり、火花が散ったりはするのだが、あたり一帯の気が澄んでみると、そこに「純粋」という状態が現われているという具合なのである。

私は、「純粋」とは組成についてみればいかなる質なのかという問いを設定した時に、河上批評から新たな示唆が得られるような気がする。「純粋」のメタフィジックと人間学は、この批評家があらゆる機会を通じて説いてきた。だから、後からそれを言うとすれば、再説敷衍や解釈ぐらいしか残されていない。これに反して、「純粋」の成分分析については特に語られたことはなかった。私の見るところ、「純粋」とはたった一つの成分から成る質でもなければ、ただ一つの原因から導き出された結果でもなくて、多様で雑然とした成分の混淆を通じて、その多様性の中にあらわれる統一的な質であり、その統一性のゆえに原理的な質のことである。この「純粋」の成分分析から河上批評というものの成立、意義を考え直してゆくことができるだろう。「純粋」ははじめから「純粋」として完璧であ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo